

苦勞の人生

三浦市支部 榮 貴代（子）

戦没者 榮 富貴男

戦没地 南支那海

その日、昭和二十年五月二十九日は祖母の六十四才の誕生日だった。

朝、「今日はおばあちゃんのお誕生日だね」と話をしていた時、ウ……と空襲警報のサイレンが鳴り、急ぎ母の御召の着物を解いて作ってあったモンペと上衣、防空頭巾（今でも忘れない白と紫の縦縞模様）、これも母の帯で作ったリュックサックを背負った。B29爆撃機が轟音と共に空いっぱい翼をひろげ頭の上を通って行く、その腹を見ると子供心に圧迫感を感じた。

焼夷弾の落ちる音は、今でも耳の底に残っている。電車道から火の手が上がって来た。山の中腹に家があったので逃げ出す時間はあったのですが、小さなバケツに水を入れ火の粉を消しながらお墓を通り、母と祖母、私の三人は自分が入学するはずだった元街小学校へ避難し、残って消火をしていた祖父を待った。大勢の人が学校に逃れて来て、中には白いシャツがかかった布団まで持って来ている人がいて、飛行機の目標になるからと怒鳴られていたり、木の下に居ると、火の粉を払う為に枝を折って持って行ってしまう人も居たりと他人を思いやる余裕などまったく

無い状態でした。

学校の反対の山にあった香蘭女学校が焼け、風にあおられると窓から紅蓮の炎が吹き出し、真っ黒な校舎がくつきりと浮かび上がり、此の世のものを見ているとは思えない恐ろしさを感じました。一週間ほど講堂に寝泊まりし、その間食事は兵隊さんが大きな鍋で煮た物をヒシヤクですくって配給して下さったのが印象に残っており、お隣に大火傷の人が居り、唸り声と火傷の臭いでこわいこわいと言っていた覚えがあります。祖父も逃げる時に両手に火傷をおっていました。我が家は横浜市中区の妙香寺（君が代発祥の寺として有名）の寺内、山の中腹にあり、百坪ほどの敷地に今で言う4LDKの平屋建、潜り戸のある大きな門、家の前庭は芝生、両サイドに小さな畑、柿、栗、夏ミカン、葡萄、無花果の木があり、私の生まれた時には主のいないイタチ小屋、雉子小屋があった。空襲が激しくなるにしたがい食糧難の為芝生を上げジャガ芋、サツマ芋畑に変わっていった。イタチ小屋は一寸した広さがあり、祖父の俳句仲間の一家が焼け出されて越して来ていた。

家に戻ってみると瓦屋根がストンとそのまま落ちており、桧のお風呂は水が入っていたので縁だけ焦げて残っていた。庭にはドカンを埋めた池が三つあり、睡蓮と金魚が無事で芋畑の周りにそら豆が植えてあったのが、ほど良く蒸し焼きになっており食べさせられたが油の臭いがひどく、その後遺症で戦後しばらくそら豆は食べられなかった。

家の裏に掘ってあった防空壕で暮らしていたが、もうここには住む事が出来ないと東京の親類の家にひと月ほどごやかになり、その後、母の姉の嫁ぎ先である三浦三崎へ四人で越して行

きました。その時は父の戦死を知る由もありませんでした。

父は日本郵船の輸送船「延元丸」でシンガポールより帰航中、南支那海にて二月六日夜中に魚雷を受け二分後に船と共に海に沈んで行ったそうです。これ以前にも二、三回撃沈され泳いで助かっていたそうですが、今回は吃水が浅いと聞き、部下を連れて書類（暗号）を取りに船室へ入った様です。常日頃一度船室に戻ったら駄目だと言っていたそうですが、局長と云う立場から吃水が浅いと聞き船室に戻ったとの事です。

戦後の母の苦労は二十代後半に、いきなり義父母と子供の四人分の生活を支えなければならなくなり、三崎と云う土地柄、早朝（夜中）に魚、主に鯖を仕入れ警察の目を逃れながらトラックの荷台に乗せてもらい、東京方面に売りに行き、帰りに煙草（キャメル）を仕入れて来て闇で売ると云う今迄の生活では考えられないことの連続でした。

私は、横浜では戦争が激しくなり入学式も勉強も無く、三崎へ来て初めて教室の机に座りました。病弱だった私は小学校卒業迄にありとあらゆる病気をし、母に心配ばかりかけておりました。世の中が落ち着き始めてから、母は交通安全協会に勤め始め、ガソリンの配給などの仕事をしながら、協会が警察の中にあつたので警察のお手伝いもした様です。ガソリンの自由販売が始まると仕事が無くなり、一転芸子組合の帳場に座る様になりました。この頃には私と母の二人暮しになつており、少しゆっくり何かをと思っていると、代り番こに入院と云った按配でした。母が仕事を止め、姉夫婦の面倒を看始めしばらくして私も会社勤務を止めて、家で書道塾を開くこととしました。この家も、母が自分の葬式を出す家がほしいと云つて二人で薄給の中から積立てをし

たり、知人に借用したりして建てた家です。老後はのんびり生活を楽しもうとしておりました矢先、原因不明の病気になり、六十一才七ヶ月で天逝してしまいました。自分で変だと思いました。あちこちの病院で見ていただき半年の事でした。母の希望通り家で葬儀を致しました。母の一生は、子供の頃に両親を亡くし、姉や兄、親戚に育てられ、結婚して六年位幸せの日があつた位で後は苦勞の連続だったと思います。

母逝きて三十年の日が過ぎし後の墓守り何としよう

生活に一人奮闘つま夫思い千の空にて逢えているやら

父母の齡遙かに越えし今為残したる事の多かりし